

電子カルテ時代におけるソーシャルワーク記録の 要件のイメージ化の試み

水野茂樹^{*1}・堀越由紀子^{*2}・西村昌記^{*2}

An approach to the model for the requirement of social work records in electronic medical record

Shigeki MIZUNO^{*1}, Yukiko HORIKOSHI^{*2} and Masanori NISHIMURA^{*2}

〈抄録〉

病院では、多職種間での情報共有が進んだ結果、医療ソーシャルワーカーもソーシャルワーク記録（以下 SW 記録）を電子カルテに記載することが多くなった。しかし、電子カルテへの記載内容に関する検証は不十分である。そこで SW 記録の要件を明らかにするために、SW 記録の理論的要件19に関する25項目と、電子カルテ時代における SW 記録の考慮事項33項目を作成し調査を実施した。前者から「ソーシャルワーカーへの利用」「クライアントへの利用」「社会活動への利用」の3因子が抽出され、これらを X-Z 軸に配置した。そして、後者からは、「普遍化する側面」「業務管理の側面」「教育研究の側面」「状況を明らかに示す側面」「適切な支援を示す側面」「効率の側面」の6因子を抽出し、X-Z 軸に配置した。これらをイメージ化することによって、ソーシャルワーカーは記録の要件を意識しやすくなり、様々な目的に応えられる記録を作成することができるようになると考えられる。

Key words：ソーシャルワーク記録、電子カルテ、記録の要件、記録のイメージ化

I. はじめに

2001年に厚生労働省が策定した「保健医療分野の情報化にむけてのグランドデザイン」において、2006年には400床以上の病院の6割が電子カルテ化普及することを目標として掲げている。実際には、400床以上の病院において、2008年には38.8%の普及率に留まっているが、それでも2002年の2.9%から比べると急速な増加を示している。

医療機関のカルテが紙主体であった頃は、ソーシャルワーカー（以下 SWer）がカルテに記載するには不便さがあり、ソーシャルワーク記録（以下 SW 記録）がカルテとは別に管理されていることが多かった。しかし、電子カルテ化によって事態が大きく変わった。麻生ほか（2006）が電子カルテを導入している病院に行った調査

では、ソーシャルワーク部門（以下 SW 部門）が何らかの形で電子カルテに参入している病院は9割、そのうち閲覧と記載をしているのは8割という結果を得ているように、診療データの一元管理や共有化の流れのなかで、SWer の記録も他職種と共通のカルテに記載するようになったのである。

一方、浅野（2005）は、SW 記録の現状と課題を電子カルテ化の流れのなかで概観しており「SW 記録の標準化のあり方を早急に検討しなければならない」と述べている。また、間嶋（2014）は「MSW の電子カルテ参入は進んでいるが、何を電子化していくのかという標準化についての学術的な議論は進んでいない」と指摘する。増井（2013）は、電子カルテにつながる SW 部門システムの導入に関する報告のなかで「MSW の記録を電子カルテに載せることは、同時に他職種と記録を共有することを意味し、他職種と共有する記録のあり方について考

* 1 国立病院機構神奈川病院医療福祉相談室（Department of Medical Social Welfare, National Hospital Organization Kanagawa Hospital）

* 2 東海大学健康科学部社会福祉学科（Department of Social Work, School of Health Sciences, Tokai University）

えなければならない」と締めくくっている。このように SW 記録の標準化を早急にすすめなければならないと指摘されているものの、その先に歩みを進められてはいない。

ここに至って、医療機関の SWer にとっての SW 記録とは、他職種との共有が求められるということを認識しながら、SW 記録に求められる要件をあらためて確認する必要があると考えた。一方、従来の記録の要件に値するものについては、ハミルトン (G. Hamilton, 1946) の記録の目的、ケーグル (J. D. Kagle, 1991) の記録の活用、ティムズ (N. Timms, 1989) の記録の意義等が示されている。しかし、SW 記録は単一の目的や意義を持つというよりは、使い方や読み手によって異なる様々な目的や意義がある。したがって、SW 記録としての要件を完全に満たす記録という定義でこれを捉えることは困難であり、いわば有機的な関係のなかで、SW 記録としての要件を備えた記録を捉えなければならないと考える。本研究においては、この SW 記録としての要件を備えた記録とは何かということについて浮かぶ像を、ソーシャルワーク記録の要件のイメージと定義することとした。そして、電子カルテ時代における SW 記録の要件について実態調査を通じて明らかにし、それら要件の相互の関係を含めてイメージ化を試みることにした。

Ⅱ. 対象と方法

1. 調査対象

(公財) 日本医療機能評価機構が病院機能評価で認定し公開されている2267病院(2015年5月14日)から、無作為に500病院を抽出した。対象を病院機能評価認定病院としたのは、病院機能評価の目的として、病院の組織的活動を患者の目に触れない部分も含めて第三者が評価していることから、病院として一定以上の質の高い医療を提供し、これからの病院のスタンダードとなることが期待できるためである。また評価項目のなかでも「診療・ケアにおける質と安全の確保」の下位項目において、「診療記録を適切に記載しているかどうか」を評価しており、組織的に記録を適切に行い、かつ保全していると考えられた。病院の機能としても、一般病院、リハビリテーション病院、療養型病院、精神科病院、およびこれらの複合型病院というように幅広く、また SW 部門も評価項目の対象となっていることから、所属する SWer も病院内での相應の役割を担っており、SW 記録に対する意識の高さも期待できると考えられた。

2. 調査方法

対象となる病院の SWer あてに、調査用紙を1部郵送した。当該施設に所属する SWer の中から、本調査の回答者として任意の SWer 1名を各施設において決めて、無記名により回答していただいた。

3. 調査期間

調査期間は2015年8月28日～2015年9月18日とした。

4. 調査項目

1. 回答者や所属機関、所属部門に関する基本属性について

基本属性は、個人に関する項目(年齢、SWerとしての経験年数、勤務先の勤続年数、勤務先における職位、社会福祉士等の資格の有無)、所属機関に関する項目(病院の機能、所属部門の構成職種および構成人数、電子カルテ導入やSW記録のカルテ記載の有無や閲覧権限)とした。

2. 理論的 SW 記録の要件について

まず、ハミルトン (G. Hamilton, 1946: 3-9) の記録の目的、ケーグル (J. D. Kagle, 1991: 2-5) の記録の活用、ティムズ (N. Timms, =1989: 32-63) の記録の意義、岡村 (1965: 6-11) が解説したハミルトン (G. Hamilton) の示す記録の目的ををもとに、理論的 SW 記録の要件の下位項目を作成した。なお、岡村 (1965: 6-7) は「社会福祉機関や施設において、ケース記録の作製に、多くの時間と労力をかけ、そのうえいろいろ工夫や設備をしてこれを整頓し、保管するのには、およそ次の四つの目的があるからである」と述べているが、解説においては3つの目的で整理されている。ハミルトン (G. Hamilton, 1946: 4) が “These purposes are usually formulated as practice, administration, teaching, and research.” と述べていることから、岡村 (1965: 9) は、teaching と research を統合して「教育と研究に役立つようにする」としたようである。項目としては、ハミルトン (G. Hamilton, 1946) に従い分離することにした。

次に、本邦における文献との整合性を確認するため、岩間 (2006) や副田ほか (2006) による記録の目的と比較検討を行い、項目が網羅されていることを確認した。そして、ここで挙げたすべての項目を、川喜田 (1967) による KJ 法によって再編成したところ、グループの数は19となった。これを理論的 SW 記録の要件として(図1)に示す。横軸は、クライアントに対する支援

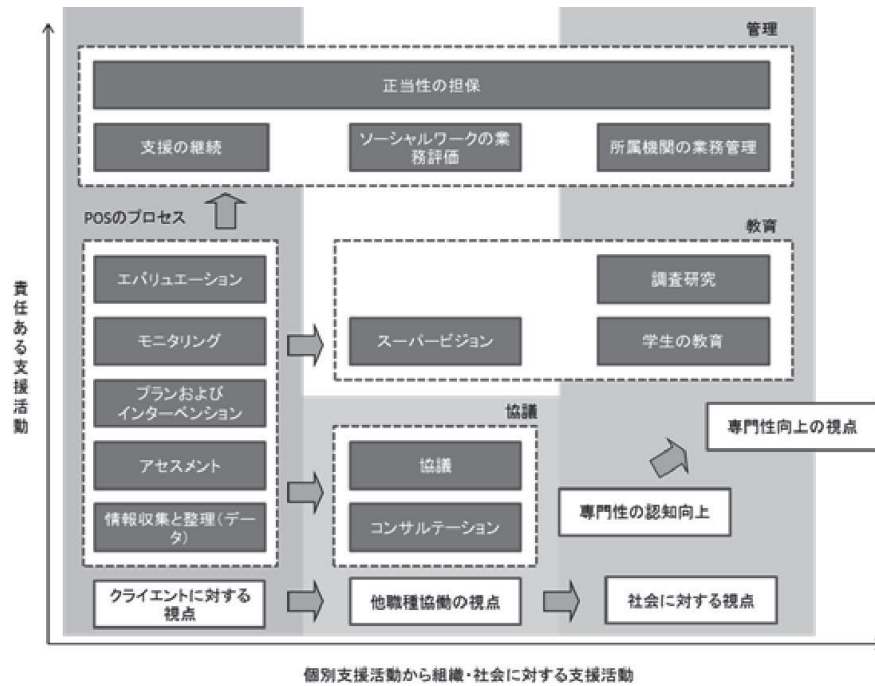


図1 理論的 SW 記録の要件の図

から他職種協働の視点、そして社会に対する視点へと視点が広がるため「個別支援活動から組織・社会に対する支援活動」とした。縦軸は、個別支援活動においても、情報収集と整理（データ）からモニタリング、エバリュエーションへとソーシャルワーカーとして支援の評価を行う方向に発展し、さらに普遍的な支援活動へと視点に変化していくことから「責任ある支援活動」とした。個別支援活動の記録として、①情報収集と整理（データ）、②アセスメント、③プランおよびインターベンション、④モニタリング、⑤エバリュエーションは同じ集まりに属すると考えられた。この集まりは、ウィード（L. Weed, 1970）が提唱したPOS（Problem Oriented System）のプロセスと重なる。同様に、同じ集まりとしてまとめられるものを破線で囲ったところ、管理（⑥支援の継続、⑦ソーシャルワークの業務評価、⑧所属機関の業務管理、⑨正当性の担保）、協議（⑩協議、⑪コンサルテーション）、教育（⑫スーパービジョン、⑬学生の教育、⑭調査研究）の集まりができた。なお太い矢印は、発展的利用の方向性を示す。

集まりに属さず、視点の広がりを出す項目である、⑮クライアント（以下CI）に対する視点、⑯他職種協働の視点、⑰社会に対する視点は、「個別支援活動から組織・社会に対する支援活動」の方向性と重なるので横軸に並行に配置した。⑱専門性の認知向上、⑲専門性向上の視点は、他の項目が記録の用途であるのに対して、援

助者の専門性に関わるものである。記録がより発展的に使われることによって、広がっていくものと考え、原点から同心の円弧を描き配置した。

なお、この理論的SW記録の要件の下位項目は（表1）の番号に下線を付してある25項目にあたる。

3. 電子カルテ時代におけるソーシャルワーク記録の要件について

電子カルテ時代におけるSW記録の要件を検証する質問紙を作成するためには、理論的SW記録の要件の下位項目に、今日の医療福祉領域のSWerが行っている記録の項目を加える必要があると考えられた。そこで、わが国の医療福祉領域のSWerの実践から生まれた記録としての視点である、坪上（2003：7－8）が実践記録にもりこむべきとした8条件のうち、重複していない項目を追加した。

また、長谷川（2012）は、一般病床400床以上、DPC実施、病院機能評価受審の医療機関を対象に調査を行っているが、SWerが他職種と共有する記録に記載する書式について、SOAP方式によると回答したものが34.7%、自由記載が61.2%、その他が4.1%との結果を得ており、今日の医療機関のSW記録として、SOAP方式による記録が普及しつつあることを示している。SOAP方式の記録については、日野原（1973：142－143）は、ハースト（Hurst, 1971）の「The Reasons Why Lawrence Weed is

表1 ソーシャルワーク記録の要件について（度数分布）

番号	質 問	あては まらない	あまり あては まらない	どちら ともい えない	ややあ てはま る	かなり あては まる	平 均 値	標 準 偏 差
<u>1</u>	CIの状況を個別化して問題が明らかになるように記述している		9 (6.3)	32 (22.4)	69 (48.3)	33 (23.1)	3.9	.8
<u>2</u>	CIとSWerの相互作用について記述している	9 (6.3)	38 (26.6)	61 (42.7)	33 (23.1)	2 (1.4)	2.9	.9
<u>3</u>	CIとCIをとりまく環境との関係について記述している		8 (5.6)	18 (12.5)	85 (59.0)	33 (22.9)	4.0	.8
<u>4</u>	複雑な状況を整理して記述している	1 (.7)	4 (2.8)	18 (12.5)	100 (69.4)	21 (14.6)	3.9	.7
<u>5</u>	全てを読まなくても、ある程度は内容が分かるような記述をしている	4 (2.8)	5 (3.5)	45 (31.5)	78 (54.5)	11 (7.7)	3.6	.8
<u>6</u>	解決すべき課題に焦点をあてるなど、効率的な記述をしている	2 (1.4)	8 (5.6)	29 (20.1)	89 (61.8)	16 (11.1)	3.8	.8
<u>7</u>	課題解決のための話し合いの内容を記述している	1 (.7)	8 (5.6)	21 (14.7)	86 (60.1)	27 (18.9)	3.9	.8
<u>8</u>	SWerの判断を記述している	3 (2.1)	7 (4.9)	24 (16.7)	86 (59.7)	24 (16.7)	3.8	.8
<u>9</u>	支援についての理論的な枠組みを意識して記述している	3 (2.1)	32 (22.7)	58 (41.1)	44 (31.2)	4 (2.8)	3.1	.9
<u>10</u>	CIに対する支援内容を逐次、記述している	2 (1.4)	7 (4.9)	22 (15.5)	75 (52.8)	36 (25.4)	4.0	.9
<u>11</u>	記録を通して、CIに対する支援を継続的に評価している	4 (2.8)	31 (21.7)	55 (38.5)	46 (32.2)	7 (4.9)	3.2	.9
<u>12</u>	CIに対する支援の再評価を記述している	10 (6.9)	43 (29.9)	43 (29.9)	43 (29.9)	5 (3.5)	2.9	1.0
<u>13</u>	CIが行ったこと、行えたことを明らかにして記述している	4 (2.8)	16 (11.2)	41 (28.7)	62 (43.4)	20 (14.0)	3.6	1.0
<u>14</u>	記録を通して、CIの立場を守っている	2 (1.4)	11 (7.6)	42 (29.2)	74 (51.4)	15 (10.4)	3.6	.8
<u>15</u>	記録をCIとのコミュニケーションに生かしている	14 (9.7)	21 (14.6)	42 (29.2)	52 (36.1)	15 (10.4)	3.2	1.1
<u>16</u>	同職種内で、ある程度は共通の書式で記述をしている	8 (5.6)	11 (7.6)	21 (14.6)	63 (43.8)	41 (28.5)	3.8	1.1
<u>17</u>	他職種と、ある程度は共通の書式で記述をしている	20 (13.9)	36 (25.0)	43 (29.9)	31 (21.5)	14 (9.7)	2.9	1.2
<u>18</u>	記録を通して、他の専門職と連携を促進している	5 (3.5)	8 (5.6)	25 (17.4)	76 (52.8)	30 (20.8)	3.8	.9

<u>19</u>	CIに対する支援の引き継ぎに記録を利用している	2 (1.4)	3 (2.1)	22 (15.3)	66 (45.8)	51 (35.4)	4.1	.8
<u>20</u>	記録を通して、SWerとして成長すると思う		2 (1.4)	27 (18.8)	64 (44.4)	51 (35.4)	4.1	.8
<u>21</u>	記録を通して、他の専門職にSWerの専門性を伝えられると思う		8 (5.6)	31 (21.5)	65 (45.1)	38 (26.4)	3.9	.8
<u>22</u>	SWerの業務管理に記録を利用している	3 (2.1)	25 (17.5)	35 (24.5)	43 (30.1)	37 (25.9)	3.6	1.1
<u>23</u>	所属機関の提供するサービスの改善に記録を利用している	16 (11.1)	28 (19.4)	56 (38.9)	34 (23.6)	10 (6.9)	3.0	1.1
<u>24</u>	所属機関の業務を評価するために記録を利用している	17 (11.9)	31 (21.7)	56 (39.2)	30 (21.0)	9 (6.3)	2.9	1.1
<u>25</u>	所属機関の経営方針を決定するために記録を利用している	42 (29.4)	38 (26.6)	47 (32.9)	12 (8.4)	4 (2.8)	2.3	1.1
<u>26</u>	記録を蓄積し利用することで、地域社会の福祉の向上に役立てている	32 (22.2)	40 (27.8)	49 (34.0)	20 (13.9)	3 (2.1)	2.5	1.1
<u>27</u>	記録によって、法的にCIに対する支援の正当性を示している	9 (6.3)	24 (16.7)	56 (38.9)	43 (29.9)	12 (8.3)	3.2	1.0
<u>28</u>	記録によって、診療報酬等の対価の正当性を示している	17 (11.8)	22 (15.3)	37 (25.7)	58 (40.3)	10 (6.9)	3.2	1.1
<u>29</u>	記録の重要性を意識している			9 (6.3)	57 (39.9)	77 (53.8)	4.5	.6
<u>30</u>	記録をコンサルテーションに生かしている	10 (6.9)	18 (12.5)	48 (33.3)	51 (35.4)	17 (11.8)	3.3	1.1
<u>31</u>	記録をスーパービジョンに生かしている	18 (12.6)	19 (13.3)	40 (28.0)	47 (32.9)	19 (13.3)	3.2	1.2
<u>32</u>	記録を学生や実習生に対する教育に生かしている	29 (20.3)	14 (9.8)	36 (25.2)	47 (32.9)	17 (11.9)	3.1	1.3
<u>33</u>	記録をもとに研究をすることがある	35 (24.3)	34 (23.6)	43 (29.9)	24 (16.7)	8 (5.6)	2.6	1.2

Right」の論文を紹介し、SOAP方式の記録を経過記録として用いるPOSの特徴を挙げている。この特徴のうち、ここまで作成した質問紙に不足するものを、項目として追加したところ、最終的に計33項目となった。(表1)

5. 分析方法

清水(2016)による統計分析ソフトHAD Ver.16.00を利用した。因子分析においては、1項目でも欠損値があるデータは分析から除外した。また、因子所属が不明の

因子や因子負荷量が小さい因子を順に取り除いて因子分析を行った。

6. 倫理的配慮

調査対象の選定と実施における利益相反がないこと、調査への協力は任意であること、調査者のプライバシー保護を厳守すること、調査データの研究目的以外の活用を行わないことなど倫理的配慮に厳に留意した。なお、本研究は「ソーシャルワーク記録としてのSOAP方式の記録の有用性に関する実証的研究」として、東海大学

健康科学部倫理委員会を受審し、承諾を得てから実施した。

Ⅲ. 調査結果

1. 回収率

回収数は144枚（回収率28.8%）であった。

2. 調査結果の詳細

1. 回答者や所属機関、所属部門に関する基本属性について

1. 回答者について

性別は、男性52名、女性92名であった。年齢は、平均が37.7歳（標準偏差7.7）であり、経験があり年齢層の高いSWerが回答したと考えられた。このことは、SWerとしての経験年数の平均が11.2年（標準偏差6.8）であることや、職位が部門長などの管理職と主任などの上級一般職をあわせると46.9%となっていることから推察できる。

資格については複数回答可としたが、社会福祉士123、精神保健福祉士52、介護福祉士11、介護支援専門員57、社会福祉主事任用資格54、その他10であった。介護支援専門員の度数が比較的高いが、介護支援専門員になるには、社会福祉士や精神保健福祉士等で5年以上の実務経験を経ないと受験ができないため、ここでも経験あるSWerが回答している状況が伺えた。

2. 回答者の所属施設について

所属機関の合計病床数は、平均値が304.2床（標準偏差223.3）とばらつきが大きかった。最も病床数の多い病床は、一般病床が76.8%、療養病床が14.1%、精神病床が9.2%の結果を得た。施設基準については複数回答可能としたが、三次救急指定21、二次救急指定60、特定機能病院10、DPC対象病院71、地域医療支援病院38、エイズ治療拠点病院19、がん診療連携拠点病院（県指定を含む）31であった。

3. 所属部門の状況について

所属部門を構成している職種について複数回答可としたが、SWer143、看護師76、事務職72、医師34、その他18となっている。SWerの所属部門がSWer単独ではなく、多職種が混在している状況が推察された。所属部門のSWerの人数については、非常勤の人数を0.75人とした場合の所属部門のSWerの常勤換算人数を求めたところ、平均値が4.3人（標準偏差2.6）であった。医療機関におけるSWerの複数配置がすすんでいることが示された。

4. 記録の状況について

電子カルテを導入済みが72.9%、導入予定も入れると77.8%に達した。また、SWerが経過記録をカルテに「原則記述している」「部分的に記述している」と回答したものが、89.5%であった。SW記録を所属部門以外の職員も可と回答したものが76.2%であった。

2. SW記録の要件について

回答分布と平均値、標準偏差を（表1）に示す。度数の下にある（括弧）は、パーセントを示す。平均値と標準偏差は、あてはまらない（1）、あまりあてはまらない（2）、どちらともいえない（3）、ややあてはまる（4）、かなりあてはまる（5）の順序尺度に、（括弧）内の点数を与えて算出した。

Ⅳ. 分析結果

1. 理論的 SW 記録の要件について（3因子）

理論的 SW 要件による図（図1）では、X-Y軸の2軸で示したが、すでに項目が複雑に関係しあって概観性に欠けており、本研究の目的である記録の要件のイメージ化を試みるには、もう1軸加えたX-Z軸の3軸は必要と考えられた。そこで理論的 SW 記録の要件については、因子の固有数を3因子として主成分法により因子を抽出した。各因子に独立の関係を想定し、バリマックス回転を行ったところ（表2）の結果が得られた。

第1因子の下位項目をみると、組織や地域における利用や、業務管理の項目から構成されていることから「社会活動への利用の軸」とし、第2因子は、SWerとしての成長や状況の明確化やSWerの専門性の項目から構成されていることから「SWerへの利用の軸」、第3因子は、CIの状況を明らかにして、正当な支援を行うことに関する項目から構成されているため「CIへの利用の軸」とした。

2. 電子カルテ時代における SW 記録の要件について（6因子）

電子カルテ時代における SW 記録の要件については、すべての質問である33項目について、より精密に検証するために、スクリープロットから6因子として、主因子法により因子を抽出し、項目の相関も考えてプロマックス回転を行ったところ（表3）の結果が得られた。

ここでは、第1因子を「普遍化する側面」、第2因子を「業務管理の側面」、第3因子を「教育研究の側面」、第4因子を「状況を明らかに示す側面」、第5因子を

表2 理論的要件 (3因子による因子分析)

項目	因子			共通性
	1	2	3	
所属機関の業務を評価するために記録を利用している	.896	.077	.146	.830
所属機関の提供するサービスの改善に記録を利用している	.882	.054	.076	.787
所属機関の経営方針を決定するために記録を利用している	.812	-.038	.064	.665
記録を蓄積し利用することで、地域社会の福祉の向上に役立てている	.742	-.020	.149	.574
SWer の業務管理に記録を利用している	.577	.298	.131	.438
記録をスーパービジョンに生かしている	.569	.211	.160	.394
記録を通して、SWer として成長すると思う	.143	.741	-.020	.569
CI に対する支援の引き継ぎに記録を利用している	.008	.647	.114	.431
複雑な状況を整理して記述している	.059	.644	.070	.423
CI の状況を個別化して問題が明らかになるように記述している	.073	.642	.198	.456
記録を通して、他の専門職に Swer の専門性を伝えられると思う	.050	.608	.290	.456
SWer の判断を記述している	.089	.514	.202	.313
CI が行ったこと、行えたことを明らかにして記述している	.099	.089	.782	.630
CI に対する支援内容を逐次、記述している	.109	.157	.725	.563
記録を通して、CI に対する支援を継続的に評価している	.184	.105	.646	.462
記録を通して、CI の立場を守っている	.295	.162	.607	.482
課題解決のための話し合いの内容を記述している	-.001	.245	.554	.368
因子寄与	3.630	2.701	2.510	
α 係数	.855	.736	.739	

「適切な支援を示す側面」、第6因子を「効率の側面」と名づけた。

3. 電子カルテ時代における SW 記録の要件の図について

本研究では、理論的 SW 記録の要件の下位項目に、電子カルテ時代における SW 記録の項目を加えて質問紙を作成した。質問紙を作成する過程で、SW 記録の要件としての骨格としては大きくは変わっておらず、むしろどのような利用をされるかという側面が、時代や環境の影響を受けて大きく変わってきていると考えられた。

そこで、記録の要件のイメージ化を行うにあたっては、理論的 SW 記録の要件の下位項目である25質問から得られた「CI への利用の軸」「社会活動への利用の軸」「SWer への利用の軸」を、X-Z 軸として配置した。

次に、今日の医療福祉領域の SWer が行っている記録の項目を加えた33質問から「普遍化する側面」「業務管

理の側面」「教育研究の側面」「状況を明らかに示す側面」「適切な支援を示す側面」「効率の側面」の6つの側面を抽出した。

これら6つの側面を、3軸のなかに特徴的に配置するようにし、電子カルテ時代における SW 記録の要件の図を作成した。(図2)

SW 記録としての要件を満たす、望ましい SW 記録とは、単一の役割だけでなく、使い方や読み手によって異なる様々な目的や意義を担うものと考えられる。したがって、SW 記録の目指すものは、例えば(図2)の星印にあたる。太い2本の矢印は、さまざまな要件を満たしていく記録のあり方を示す。記録は、個別支援活動に対するものから始まり、より幅広い利用や教育に活かせるものへと発展し、記録を開始し始めてから一直線にというよりは、その時々での記録の求められる役割を果たしつつ、円弧や蛇行を描きながら、望ましい SW 記録が完成されていくのである。

表3 電子カルテ時代における SW 記録の要件 (6因子による因子分析)

項目	因子						共通性
	1	2	3	4	5	6	
記録を蓄積し利用することで、地域社会の福祉の向上に役立っている	.635	.156	.182	-.154	-.097	.016	.664
CI と SWer の相互作用について記述している	.617	.005	.024	.100	.033	-.034	.440
他職種と、ある程度は共通の書式で記述をしている	.608	-.258	-.097	.156	.057	.049	.290
CI に対する支援の再評価を記述している	.568	.080	-.066	.001	.171	.083	.440
支援についての理論的な枠組みを意識して記述している	.549	.024	-.088	.033	.070	.010	.301
SWer の業務管理に記録を利用している	-.332	.846	-.055	.013	.192	.076	.613
所属機関の提供するサービスの改善に記録を利用している	.172	.845	-.061	.041	-.119	.005	.814
所属機関の業務を評価するために記録を利用している	.202	.772	.051	-.032	-.055	-.040	.812
記録を学生や実習生に対する教育に生かしている	-.159	-.179	.959	-.005	.078	.017	.698
記録をスーパービジョンに生かしている	-.024	.195	.712	-.046	-.001	-.046	.624
記録をコンサルテーションに生かしている	.124	.074	.532	.175	.035	-.070	.527
記録をもとに研究をすることがある	.303	-.072	.424	-.061	-.040	.107	.362
CI と CI をとりまく環境との関係について記述している	.098	-.065	-.009	.805	-.002	-.080	.617
CI の状況を個別化して問題が明らかになるように記述している	.123	.023	-.076	.786	-.006	.010	.629
複雑な状況を整理して記述している	-.130	.009	.186	.484	-.145	.329	.480
同職種内で、ある程度は共通の書式で記述をしている	-.042	.161	.047	.389	.198	-.085	.295
CI が行ったこと、行えたことを明らかにして記述している	.174	-.055	.054	-.125	.791	.008	.660
CI に対する支援内容を逐次、記述している	.115	.011	.077	.079	.568	-.048	.443
課題解決のための話し合いの内容を記述している	-.093	.133	-.038	.134	.421	.138	.310
解決すべき課題に焦点をあてるなど、効率的な記述をしている	.062	-.004	-.026	-.068	.021	1.017	1.003
全てを読まなくても、ある程度は内容が分かるような記述をしている	.064	.065	.003	.028	.035	.524	.336
因子寄与	3.825	3.822	3.782	2.730	2.257	2.098	
α 係数	.730	.841	.785	.710	.675	.736	
因子間相関							
第 2 因子との相関	.544						
第 3 因子との相関	.543	.507					
第 4 因子との相関	.163	.192	.347				
第 5 因子との相関	.253	.239	.225	.386			
第 6 因子との相関	.107	.234	.209	.338	.206		

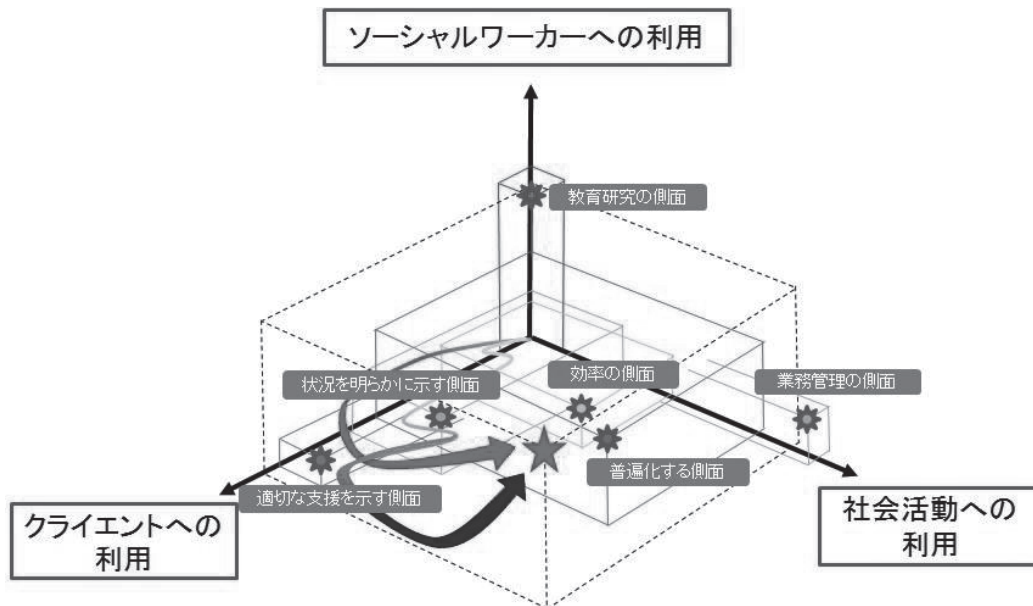


図2 電子カルテ時代における SW 記録の要件の図

V. 考察

電子カルテ時代における SW 記録の要件を探索するにあたって、電子カルテの使用の有無や回答者が記録に習熟していること、他職種と協働する環境に置かれていることは重要な要素となると考えられた。今回の回答者の基本属性をみると、SWer としての経験が豊かで、管理的な立場にあること、複数および資格の取得要件として上位に位置する資格を有する者が多かったことが確認された。また、調査対象となった施設は、病床数や病床種別、施設基準をみても多様であったと言える。一方で DPC 対象病院も多く、経営の側面からは意欲的である施設が多いことが推察された。電子カルテ導入済みが 72.9%、そのうち SW 記録をカルテに記述している医療機関が 89.5% と極めて高かったことや、76.2% の高い水準で所属部門以外の職員も閲覧可能であったことから、本研究の対象としての要件を満たしていると考えられた。

(図2)における「CI への利用の軸」と「社会活動への利用の軸」の違いは、対象を CI とした個別支援活動に対する利用から、より発展的に対象を組織や地域に広げた利用に対する違いがあることに注目したい。また「SWer への利用の軸」についても発展的な利用に見えるが、教育から成長といった時間軸が存在し、対象も SWer に向いているところが異なる。X 軸から X 軸と Y 軸の 2 軸になるということは、個々の支援から組織や地域へと発展的に広がることを示す。これに時間の要素を

持つ Z 軸を重ねることに SW 記録の要件として無理は生じないと考えられた。

ここで、理論的 SW 記録の要件の図 (図1) と電子カルテ時代における SW 記録の要件の図 (図2) を比較する。前者はさまざまな項目が示されているものの関係が分かりづらいが、後者では「CI への利用」「社会活動への利用」「SWer への利用」の 3 軸のなかで、どの軸にかかる要素が強いのかという関係性のなかで具体的な側面が示すことが出来たと言えよう。このように本研究において、あえて SW 記録の要件のイメージ化を図った理由は、SWer ひとりひとりが、この望ましい SW 記録を臨床において思い描きながら、より良い記録を行えるようにすることにある。SW 記録の目的や意義、活動等については、先行文献においても示されており、本研究においてもそれらを集約したところ 33 項目が生成された。しかし SWer が、これらの項目をひとつひとつ意識して記録を行うことは、項目数の多さもさることながら、経験年数や業務環境が様々な状況では、決して容易なことではない。しかし、本研究が目指したように、項目に共通する因子を抽出してイメージ化することによって、SWer 誰もが記録の要件を容易に意識できるようになり、様々な目的に応えられる意識を行うことができるようになるのではないかと考える。

本研究の限界としては、回収率が低くサンプル数を十分に得られなかったことが挙げられる。また、調査対象者が電子カルテの導入によって他職種と協働する環境におかれていることや、経験や職位のある SWer が多かつ

たことは、これからの SW 記録の要件を探索するにあたっては良かったものの、今日の SW 記録の実態を把握し、課題を抽出するには、調査対象者をより幅広くする必要があると考えられた。

引用文献・参考文献

- 浅野正嗣 (2005) : 医療ソーシャルワーク記録の現状と課題 - 電子カルテ化の検討に向けて, 金城学院大学論集社会科学編, 1, 1-2, 1-19.
- 麻生順子・松野勝民・隅田直子ら (2006) : 電子カルテ化時代におけるソーシャルワーク業務のありかたについて, 医療と福祉, 80, 40-1, 85-99.
- Hamilton (1946) : Principles of Social Case Recording, Columbia Univ Pr.
- 長谷川尚子 (2012) : 医療ソーシャルワーカーのケース記録と記録を活用した多職種連携に関する実態調査, 日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻2012年度修士論文.
- 日野原重明 (1973) : POS - 医療と医学教育の革新のための新しいシステム, 医学書院.
- Hurst JW (1971) : The Reasons Why Lawrence Weed is Right, N Engl J Med, 284, 1, 51-52.
- 岩間文雄 (2006) : ソーシャルワーク記録の研究と実際, 相川書房.
- Jill Doner Kagle. ed. (1991) : Social Work Records, 2nd, Waveland Press, Inc.
- Jill Doner Kagle. ed. (1991) : Social Work Records, 2nd, Waveland Press, Inc. 久保絃章・佐藤豊道監訳 (2006) ソーシャルワーク記録, 相川書房.
- 実践記録研究会編 (2003) : 方法としての実践記録～医療

- ソーシャルワークの現場から, 相川書房.
- 川喜田二郎 (1967) : 発想法 - 創造性開発のために, 中公新書.
- 厚生労働省 (2001) : 保健医療分野の情報化にむけてのグランドデザイン.
- 厚生労働省 (2014) : 第3回社会保障分野サブワーキンググループ及び医療機関等における個人情報保護のあり方に関する検討会の合同開催 議事次第及び資料.
- Lawrence L. Weed (1970) : Medical Records, Medical Education and Patient Care, Press of Case Western Reserve University.
- 間嶋健 (2014) : MSW の各種記録が統合された電子記録システムの構築における研究, ソーシャルワーク研究, 40, 1, 73-79.
- 増井優 (2014) : 東京都保健医療公社における MSW システムの導入について, 医療と福祉, 94, 47-1, 36-47.
- (公財) 日本医療機能評価機構 (2015) : 機能種別版3rdG, ver1, 1.
- Noel Timms (1972) : Recording in Social Work. Routledge & Kegan Paul, 久保絃章・佐藤豊道・佐藤あや子訳 (1989) ソーシャル・ワークの記録, 相川書房.
- 岡村重夫 (1965) : ケース・ワーク記録法 - その原則と応用, 誠信書房.
- 清水裕士 (2016) : フリーの統計分析ソフト HAD 機能の紹介と統計学習・教育 研究実践における利用方法の提案, メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 副田あけみ・小嶋章吾編著 (2006) : ソーシャルワーク記録, 誠信書房.

Abstract

Hospital social workers have also frequently described social work records (SW records) in electronic medical records as a result of data sharing among interdisciplinary team. However, verification on the description content in the electronic medical record is insufficient. Therefore, in order to clarify the requirement of SW recording, 25 items on the 19 theoretical requirements of the SW record, and 33 items for considering the SW record in the electronic chart era were created and investigated.

From the former, three factors, "use for social workers", "use for clients" and "use for social activities" were extracted and arranged on the X - Z axis. From the latter, six factors are extracted: "aspects to universalize" "aspects of business management" "aspects of educational research" "aspects that clearly show the situation" "aspects showing appropriate support" "efficiency aspects", and placed on the X - Z axis. By visualizing these images, social workers are more likely to be aware of the requirement of recording, and it will be possible to create records that can respond to various purposes.

Key words: Social Work Record, Electronic medical records, Social Work Records requirement, Visualization of SW Records